



# 放友会だより

<http://kanagawa-hoyukai.jp>

No.73

2023年10月1日発行

神奈川放友会

*A kindness is never lost!*

## 行事報告

### ◆ 三殿台勾玉づくり教室 ◆

7月2日(日) 参加者 22名

この指とまれ企画として、三殿台遺跡の考古館前で「勾玉づくり」を体験しました。テントに並べられた作業台



に向かい、篆刻で使う石をやすりで削っていきます。完成し成形された勾玉を、紐に通して首からかけると、古代の縄文人になったようで、参加者は満足げな様子でした。

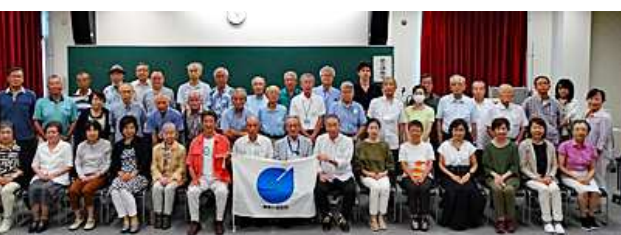
### ◆ 夏季例会 ◆

8月6日(日) 参加者 51名



ようやく神奈川学習センター第8、第9講義室を使っての例会となりました。柳本信一郎会員の紹介で、

元日本航空パイロットの山本恵志郎氏をお招きし、ジャンボ機機長としての体験と、ネパールでの学校建設についてお話しいただきました。あしなが育英会には7,500円の募金が集まり、ネパール人の



### ◆ 一泊研修旅行 ◆

9月6日(水)~7日(木) 参加者 20名

金沢文庫駅に集合すると「称名寺」を見学、「中世学僧列伝」の講習の後、バスで上郷・森の家に移動、



川瀬藤典会員の「モンテヴェルディにおける作曲手法変革の考察」の卒業研究発表から、夕食・懇親

会となりました。二日目は横須賀軍港巡りクルーズ、三笠公園で戦艦三笠を見学してから、横須賀中央で懇親会となりました。



### ◆ 会内同好会ほか ◆

クラシックを楽しむ会(9/16:11名)、女性の会(8/1:4名、9/5:5名)、書に遊ぶ会(8/17:10名、9/21:7名)、「テニスを楽しむ会(7/28:6名、8/18:6名、9/17:6名)」、音楽部(7/6、20、8/3、24、31、9/28:各4名)、俳句の会(8/17:9名、9/21:10名)、温泉学研究会研修旅行(8/29~8/30:16名)の盛りだくさんな会内同好会の活動の他、この指とまれ企画として、サマーフェスタ BBQ-祭り(8/16:16名)が行われ、フェスタ・ヨコハマ(9/3)も一日限定で開催されました。



## これからの予定

10月22日(日) 秋季例会

10月25日(水) パソコン勉強会

12月5日(火) クラシックを楽しむ会

11月15日(水) 秋の学外活動

12月17日(日) 忘年会

※今後の状況等により、イベントは中止または計画、日程変更となる場合があります。詳細はホームページにてお知らせしていきます。

## 会員募集

神奈川放友会では皆さんの入会をお待ちしています。入会資格は放送大学の学生で、メールで連絡が取れること、詳しいことはホームページをご覧ください。

## 神奈川放友会理念

放送大学に向学という同じ志をもつ学生が集い、個人の学習に会員相互の交流を加え、さらに奉仕の気持ちで社会とつながる、豊かで実りある学生生活を共有することを目的とする。

## 神奈川放友会に関するお問い合わせ

メール: [info@kanagawa-hoyukai.jp](mailto:info@kanagawa-hoyukai.jp)

電話: 090-3507-7540 (事務局/真野憲助)

発行人: 兼田隆史 編集人: 鶴田昭彦

写真: 山本弘子 小川真一

# いざ鎌倉、奥のヨコ道・女の鎌倉

日本三大悪女と言われている女性をご存じですか。鎌倉時代の「北条政子」(ほうじょうまさこ)、南北朝時代の「日野富子」(ひのとみこ)、安土桃山時代の「淀殿」(よどどの：茶々)の3人。

鎌倉時代の北条政子について、なぜ悪女と言われているのか、心底悪女だったのか、その裏にはどういうことがあったのか、悪女とは何か、知りたいと思いました。そこで鎌倉時代の男性中心の歴史がほとんどのなかで、北条政子を中心に、鎌倉時代の女性たちのことを調べてみようと思ったのです。

鎌倉といえば、昨年大河ドラマ「鎌倉殿の13人」を見ていたかたも多いのではないのでしょうか。自分は前回の大河ドラマを一度も見たことがないので、どのように作られていたのか内容は知りません。いままでもそうですが特に大河ドラマの場合、それをそのまま当時の真実と信じてしまう人があながい多いものです。ドラマはドラマとしての歴史に、独特の脚色を加えるからこそ面白いのだと思います。

今回は鎌倉時代の史料や歴史研究者が書いた論文さらに小説など読んで、女性という視点から鎌倉時代をみてみました。鎌倉時代も角度をかえて、悪女と言われている北条政子を中心に、史実といわれているものを調べてみると、「事実は小説より奇なり」というようなことが、いろいろありました。どうぞ、女性たちの鎌倉もお楽しみください。

## \*奥のヨコ道歩きの行程

鎌倉駅西口 - 寿福寺 - 鶴岡八幡宮 - 頼朝墓 - 妙本寺 - 安養院 - 若宮大路 - 段葛 - 鎌倉駅東口

## 北条政子の歩んだ道

### (1) 源頼朝との結婚の意味

都育ちの頼朝は14歳の時に伊豆への流人となり、伊豆国の小土豪だった伊東氏と北条氏を頼ったとのこと。『曾我物語』によると、頼朝の初めの妻は伊東祐親(すけちか)の三女八重で、当時流人だった頼朝との結婚に祐親は反対だったとあります。そしてこの二人の間に生まれた千鶴丸という数えて2歳ばかりの孫は、祖父の祐親により簀巻きにされ松川に投げ入れて殺されたと書かれました。後日に離婚したこの八重は、親が決めた江間小四郎と再婚しました。

どちらが言い寄ったのか、政子と頼朝との結婚は治承元年(1177)、政子21歳、頼朝31歳のときでした。そういうわけでこの物語によれば、頼朝は再婚、政子は初婚です。

政子と頼朝との結婚により、その後の伊東氏と北

条氏の運命は大きく変わることとなりました。政子自身が頼朝との後々までを考えていたわけではないかもしれませんが、その後を思えば政子がこの婚姻に果たした役割は、北条氏にとって大きかったということになるのです。つまり恋が歴史を変えたのです。

### (2) 頼朝の死

頼朝は正治元年(1199)12月22日に死亡します。頼朝53歳、政子は43歳でした。原因は馬から落ちたとか急に体調を壊したとか説はいろいろです。『吾妻鏡』も建久7年(1196)から正治元年(1199)まで、すっぽりと記録が欠如していて死因についての状況は不明です。その後の推論として、落馬したのは脳溢血か心臓麻痺からとか、なぜか歯周病、敗血症、糖尿病、暗殺が原因、はたまた亡霊の呪いや人違いという奇説までありました。

#### \*頼朝の墓

八幡宮の西御門あたりに、よりとも児童公園があります。その奥が法華堂の石碑と白幡神社になります。神社の石段を上ったところに国史跡の源頼朝墓があります。



そこは持仏堂があったところで、ここに頼朝の遺骸が葬られていました。法華堂とも呼ばれていたこの場所は、三浦氏の乱ともいわれる宝治合戦(1247)で三浦一族が法華堂にこもり総勢5百余人が自害して、堂内から境内まで血で染められた地といわれているところでもあります。いまは何も知らないだろう観光客も訪れにぎやかですが、恐ろしい歴史の場所でもあるのですね。

### (3) 政子の執政はいつから

政子の具体的な執政時期について多くの研究は、頼朝の死後の摂家将軍時代としております。が、実際には将軍になった頼朝の正妻である御台所(みだいどころ)になった時点からその地位は重要視されています。

政子の立場は運命的には3度変わりました。はじめは頼朝の生存中の20年間、御台所と呼ばれていたころです。その役割は、戦いに出かける頼朝の留守中にその勤めを継続させたり戦勝祈願をしたりで家を守ることでした。御台所と呼ばれたのは、政子が『吾妻鏡』に登場した治承4年(1180)から建久6年(1195)までです。

次は夫の没後の26年間、将軍家の後家となった政子が尼御台所(あまみだいどころ)と呼ばれたこ

## いざ鎌倉、奥のヨコ道・女の鎌倉

ろです。二代將軍の長男頼家、その死後は三代將軍で次男実朝の時代です。

そして次男の実朝が暗殺されたのちは尼將軍とか二本禪尼（にほんぜんに）と言われた人生を過ごします。晩年は元仁元年（1224）に執権だった弟の北条義時の死後、その子泰時を第三執権に確定させて、病の床にっていた政子はその翌年の嘉禄元年（1225）7月21日、69歳で亡くなりました。戒名は安養院殿如実妙観大禪定尼。

### \* 寿福寺

寿福寺は北条政子を開基とし、明庵栄西を開山として、正治2年（1200）に創建されました。



### \* 政子のやぐら

やぐらとは相模国鎌倉とその周辺地域にみられる横穴式の納骨窟あるいは供養堂のことです。政子のやぐらは寿福寺にあります。



### \* 安養院

ももとは頼朝の菩提を弔うために政子が建立した長楽寺でした。鎌倉幕府滅亡のときに焼失し現在の地に移り、名前を政子の法名である安養寺に改めたということでした。現在は坂東三十三観音霊場第三番となっています。榎の大木と道路から続く寺の垣根の大躰躰が見事です。



## 政子の4人の子供たちとその死

### (1) 長女・大姫

大姫とは本名ではなく姉嬢、お姉さんという意味です。本名は不明です。治承2年（1178）伊豆国で生まれた政子の最初の子供。頼朝はそのころはまだ流人の身でした。

大姫は6歳の時に、頼朝のいとこの木曾義仲の息子である11歳の志水義高と婚約します。義高は実際には人質として鎌倉に送られてきたのです。二人の子供たちはたいそう仲良しになりました。ところが事情が変わります。義高の父の義仲が頼朝に討伐されてしまうのです。頼朝は義高も殺すことを決めますが、義高をしたう大姫の気持ちを思う政子にも止められ躊躇します。が、結局は殺してしまいます。

『吾妻鏡』によると優しくった義高を思い、落胆のあまり大姫は水も飲まなくなり、そのうちに悲しみのあまりに床に伏して、どんどんとやつれていくのです。いまでいうところの鬱病と書いた研究書もありました。

建久5年（1194）、政子は頼朝の甥にあたる公家の一条高能との縁談を勧めても大姫は義高を慕い頑なに拒みます。政子は大姫を慰めるために義高の追善供養を盛大に催しました。

建久6年（1195）、大姫の後鳥羽天皇への入内の話があり、頼朝は政治的に大きな意味のあるこの入内を強く望み、政子も相手が帝なら大姫も喜ぶだろうと考えたのですが、大姫は拒否をし、さらに病が重くなります。とうとう建久8年（1197）に20歳で死去。『承久記』によれば政子はこのときに自分も死のうと思うほどに悲しんでいるのです。

### (2) 長男・頼家

寿永元年（1182）8月12日に、頼朝には次男、政子には長男である頼家が生まれました。頼朝はおおいに喜んでこの前後に鶴岡八幡宮の参道を作らせています。

### \* 若宮大路

鎌倉駅東口から出て八幡宮の前からまっすぐの大通りがあります。これが国史跡若宮大路です。安産祈願に作った道は由比ガ浜まで続いていました。頼朝自身も工事の指揮をし、政子の父親の時政以下重臣たちも土や石を運んだり手伝いました。のちに地震や津波で崩壊したり明治には横須賀線を作るために壊されたりで、現存しているのは一の鳥居から三の鳥居までです。



### \* 段葛

若宮大路のあたりは当時湿地帯でした。そういうこともあり八幡宮へ続く一段と高い参道が段葛と呼ばれている道です。



3月9日の着帯の日には頼朝自ら帯を結んでいます。とはいえ頼朝は伊豆国時代からの愛人であった亀の前を鎌倉に呼び寄せて、逢瀬を交わっているのです。それが政子に知れて大騒ぎになることは別の項に書きました。

頼家の出産は頼朝はじめ、御家人たちにも望まれていた様子が『吾妻鏡』に書き残されています。大

## いざ鎌倉、奥のヨコ道・女の鎌倉

姫が最初の子供ですが、源氏の長男ともなると、比べものにならないくらい華々しい出産です。が、それはこの歴史書はあとから書かれたものですから、結果を知ってのこと。とはいえ、頼朝の立場が鎌倉のなかですでにできていたともいえるのでしょう。

大姫が亡くなった翌年の正治元年（1199）頼朝が亡くなります。政子は尼御台所と呼ばれるようになります。いろいろな史料によると、二代将軍となった頼家は頼朝とは別の方法で政治を実行します。頼家は決まっていた儀式にも参加せず、安達景盛を三河に出したすきに、自分が気に入っていた景盛の愛人をさらって寵愛するという女性問題を起こしたり、貴族の行う蹴鞠三昧の暮らしになったり、政子は厳しく訓戒します。源氏の棟梁としてみてはられない状況になったのでしょうか。しかしそれも無駄となり結果、十三人の重臣の合議によってことがなされる体制になりました。

頼家が将軍になったことにより乳母の比企一族の力も増大し、そのことに危機を感じた北条により比企の乱が起こり比企一族は滅亡。のちに頼家は出家させられてひとり伊豆の修善寺に幽閉。翌年には祖父の北条時政の暗殺団によって風呂場で殺されたとのこと。

頼家はそれぞれ母の違う3人の息子がいました。そのひとは三代将軍実朝という自分の叔父を殺した公暁です。

### （3）次女・三幡（さんまん）

三幡の通称は乙姫です。文治2年（1186）に頼朝と政子の次女として生まれました。頼朝からすれば第5子であり、政子の子としては第3子です。

政子の妊娠中に頼朝はまたも大進局という妾通い。大進局は頼朝の男子（貞暁）を産むのですが、政子の恐ろしいまでの嫉妬から乳母になり手もないまま、自分も身を隠します。貞暁はこのような状況で育てられたのです。

大姫を天皇の後と置いていたところ拒否され、その後大姫は亡くなりました。頼朝は今度三幡を后という入内仕事を始めます。三幡は政子の感情的な性格よりも頼朝の性格によく似ていたという説もありました。頼朝はこういうなかで死亡してしまいます。

その後三幡は高熱を出し重い病気にかかります。その憔悴ぶりを心配し、京都より針の名医である丹波時長を招き、貴人にしか与えないという朱砂丸を三幡に飲ませたところ、わずかに快復。しかし今度は目があけられないほど腫れる異様なことがおこり、驚いた時長は人力の及ぶところではないと言

い残し、砂金20両や高価な品物を受け取り京都へ帰ってしまいます。急変した三幡死去。享年14歳でした。

頼朝の死から5ヶ月半、夫と娘という相次ぐ死に遭遇し、政子の落胆は大変なものだったとあります。医者の時長は三幡に毒を盛る命令を受けて京から来たのではないかという噂が、ちまたに広がります。

### （4）次男・実朝

源実朝は建久3年（1192）8月9日に鎌倉で生まれました。幼名は千幡です。父は源頼朝、母は北条政子。乳母は政子の妹・阿波局です。兄の二代将軍頼家が追放されると、12歳で征夷大将軍となります。はじめは北条氏が執権を務めました。元久元年（1204）12月、京より後鳥羽天皇の従妹でもある後鳥羽天皇の寵臣・坊門信清の娘（西八条禅尼）を正室（御台所）に迎えます。

建永元年（1206）10月20日には母政子の命令により政子が引き取ってかわいがっていた、兄・頼家の次男である善哉を猶子に迎えて善哉（公暁）は出家。建保5年（1217）6月20日その公暁が鎌倉に帰着し、政子の命令により鶴岡八幡宮の別当になります。ここの別当とは将軍と同じ高い位です。

実朝は承久元年（1219）1月27日、雪が2尺ほど積もる日の夕刻から夜にかけて鶴岡八幡宮拝賀を迎えます。神拝を終え石段を下りようとしたそのとき公暁に襲われ、実朝は落命。享年28（満26歳没）。公暁は乳母であった三浦義村邸へかけこんだ同日に、門の前で待ち構えていた三浦の一味に暗殺されてしまいます。

政子は一日で息子と孫を殺されたのです。『承久記』によると、政子はこの悲報に深く嘆き「子供たちの中でただ一人残った大臣殿（実朝）を失いこれでもう終わりだと思いました。尼一人が憂いの多いこの世に生きねばならないのか。淵瀬に身を投げようとさえ思い立ちました」とあります。

殺害の黒幕はいろいろな見解もありわかりません。今は三浦義村ではないかという説が有力です。実朝に子供がなかったことから将軍の血筋は断絶になりました。

### \* 鶴岡八幡宮殺害場所

以前の歴史書によると八幡宮の大銀杏に隠れていた公暁は「親の敵」と叫んで襲い掛かったとされていますが、鎌倉時代前半の基本的資料である『吾妻鏡』では「石段の際」としかありません。いまはこの石段のあた



# いざ鎌倉、奥のヨコ道・女の鎌倉

りが定説です。いかにもそれらしき千年の大木だったこの銀杏も、2010年大風により倒木してしまいました。



## \* 実朝のやぐら

寿福寺の政子の墓の隣にあります。内部は牡丹唐草の紋様を胡粉や漆喰で彩色されていたとのこと。よくみるとそれらしいあと

はありますが、かなり朽ちていて詳細は不明です。

なお寿福寺は門よりなかへ入ることは禁止していて、寺の裏から墓場へ行く道を通るとやぐらに行けます。

実朝は歌人としても才能を発揮し「悲劇の天才歌人」といわれています。専横が目立った頼家とは違い文化人でもありました。天皇家との融合を図ったこととはいいながら、それが行き過ぎた結果、鎌倉の一部の御家人たちの反感をかかったようです。

『金槐和歌集』定家所伝本に 663 首（貞亨本では 719 首）の和歌が収められています。和歌の師だった藤原定家は『新勅撰和歌集』に実朝の和歌を 25 首入集させました。「世の中は つねにもがもな なぎさこぐ あまの小舟の 綱手かなしも」も選びました。勅撰和歌集に合計 92 首、『愚見抄』『愚秘抄』などにも残されています。近世の松尾芭蕉は「中頃の歌人は誰なるや」と弟子に問われ、言下に「西行と鎌倉右大臣ならん」と答えたという逸話が残されました。こういわれると実朝の和歌も読んでみたくありません。生きていた鎌倉時代の実朝の心が見えてくるかもしれません。

## 政子の人間性を表すエピソード

### (1) 亀の前事件—怒りの波及

寿永元年（1182）頼朝にとっては次男、政子にとっては長男になる頼家が誕生します。政子の妊娠中に頼朝は伊豆国時代からの愛人だった亀の前を鎌倉に呼び寄せて会っていました。政子にばれたのは父である時政の後妻、政子にとっては継母の牧の方からの告げ口です。

激しい性格の政子は当然大激怒。牧の方の血筋である牧宗親に「後妻打ち」を命じます。ところがこれが思いもかけない大事件に発展するのです。

「後妻打ち」とは本来は、貴族の女性の行事みたいなものとのこと、歴史学者の今井正晴氏は述べておりました。その方法は、夫にできた愛人を嫉妬して侍女を連れて愛人の家を壊すのです。が、実際

に壊すのではなく、行事ですからハタキみたいなので家を壊す動作をするだけです。関東育ちの政子は、京都の貴族の風習を知らなかったのでしょうか。ほんとうに亀の前のかくまわれていた伏見広綱の家をすべて破壊させてしまいました。

それを知った頼朝が今度は激怒。破壊したことというよりも、そういう話があったなら、まず自分になぜ伝えなかったということをしてです。政子の命令で実行した宗親をよんで、その髻（もとどり）を切り取ってしまうのです。

そのことに激怒したのは政子の父である北条時政です。宗親は妻の牧の方の一族ですから、頼朝からの恥辱に怒り狂って、時政は鎌倉から伊豆国へ引き上げてしまいます。これは北条氏が頼朝との関係の拒否を表しているのです。

ところで亀の前はというと、伏見氏の家からやつの思いで逃げおこせました。かくまった伏見氏は流罪となりましたが、亀の前はその後も別の場所において頼朝の寵愛はますます盛んとなったそうです。

嫉妬だけからのことならば、なぜ政子は亀の前自身を追放しなかったのでしょうか。頼朝の亀の前への寵愛があったからでしょうか。その代わりが伏見氏の流罪なののでしょうか。ある説によれば、嫉妬よりも臣下が御台所を軽んじた行為への怒りのほうが強かったのではないかとありました。となると命令を下したのは頼朝としても、その妻としての政子にも処罰権があったということ、政子を尊重しないものはこうなるということ、御家人のあいだにも広がり、ヒステリーを起こす政子の影響力が彼らにも及ぼされるかもしれないということ、知ったのではないかという説もありました。

### (2) 政子と静御前

義経の妾である静が『吾妻鏡』に登場するのは一か所のみです。それはみなさんご存じの有名な話となっています。文治2年（1186）4月8日、当時鎌倉に連行されていた白拍子の静が舞の名手だったので、政子が「天下の舞の名手がこの地に来ていて、近々帰るのでぜひそれを見たい、それを見ないのは残念」と言い頼朝を動かします。静は何度も拒否するのですが、八幡宮の回廊に呼び出され、とうとうそこで命令に従うのです。

「よし野山 みねのしら雪ふみ分けていりにし人のあとそこひしき しづやしづ しづのをだまきくり返し 昔を今になすよしもがな」と自作の歌を歌います。頼朝はこの歌を非常に不愉快に思いそれを態度に表すのです。

政子はここでも強い女性と思わせられる態度を示

## いざ鎌倉、奥のヨコ道・女の鎌倉

しています。義経を慕うこと、昔のように頼朝とも仲の良い兄弟の状態になること、それを願っている歌の内容に、感心するのです。そして自分とて同じ気持ちだったとして、親の反対を押し切って頼朝のもとへ走ったり、伊豆山の残っていたときは頼朝の安否を気遣ったりしたことを引き合いに出して、静の行いを肯定するのです。これを歌った静、それを怒った頼朝に反論した政子、こういう勇氣ある女性もいたのですね。

妊娠していた静は義経の子である男児を生みます。頼朝は男だったら殺すといっていました。政子はそのことに大反対したのです。生まれたのは男児、頼朝は安達清常に命令し赤子を取りあげて、由比ガ浜に遺棄して殺してしまうのです。ここにも政治的立場優先の頼朝と、縁を大事にする政子が見えます。

政子は気持ちが滅入っている大姫を慰めるために南御堂に参詣し、静は政子と大姫のために南御堂に舞を納めます。政子と大姫は静を憐れみ京へ帰る静とその母の磯禪師に、土産としてたくさんの重宝を与えたそうです。

### 乳母(めのと)の力

#### (1) 乳母とは

女の視点から鎌倉政治を見ていくと、その裏には乳母の力があることがよくわかります。それは鎌倉時代を知るうえでも外せないことです。

乳母はウバとも読みますが、生まれた子供に自分の乳をあげる女性というよりも、乳母=めのと、と読み、赤子を夫とともに将来まで養育する係という役割を持った女性でした。乳母になりたがるのは、若君の成長が一族に大きな権力をもたらしてくれるからです。いわば裏の権力者ともいえる存在です。

#### (2) 初代将軍頼朝と二代将軍頼家の乳母

頼朝の5人の乳母のひとりで大きな影響を与えた乳母である比企尼がいます。頼朝が伊豆に流された後も20年間にわたり頼朝の生活の面倒をみておりました。頼朝は鎌倉に屋敷も与えています。その名は今では比企ヶ谷といえます。比企家をついだ比企尼の甥で養子比企能員が、鎌倉幕府の力ある御家人として比企家が栄えました。

長男頼家が二代将軍となります。といってもこの立場は微妙でした。将軍となった頼家により、乳母だった比企の力が勢いを増してきたのです。それを良かれと思わないのは政子の実家である北条家です。この北条家との権力闘争となります。

政子の父である北条時政は、建仁3年(1203)、

頼家が重病になったのを機に、だまし討ちのように比企能員を自邸に誘き出して暗殺しました。比企の屋敷も攻め入って頼家の子であり政子の孫でもある一幡ともども、一族郎党を滅ぼします。これが比企の乱です。

頼家自身もその後に修善寺に幽閉となり、翌年に北条時政の手下により暗殺されてしまいました。北条時政は孫を暗殺したということになりますね。

#### \* 妙本寺

比企の乱で一族滅亡した比企氏の屋敷跡に建てられた寺院です。門のわきには比企能員邸址の石碑があります。参道の両側は鎌倉駅から数分とは思えないほど鬱蒼とした森です。

#### \* 比企の墓

祖師堂右手の薄暗い山すそに比企一族の墓(供養塔)があります。

#### (3) 三代将軍実朝の乳母

政子は建久3年(1192)に実朝を生みます。将軍の子として乳母の比企氏による気遣いからか、わがままいっぱい育てられた頼家のことがあったので、今度は時政の娘であり政子の妹でもある阿波局を乳母にします。

阿波局の夫は頼朝の異母弟であり義経の同母兄だった阿野全成(ぜんじょう)です。このふたりで実朝を養育することになりました。ところが気に入らないことがあったのか、夫の全成は二代将軍の頼家に殺され、阿波局は政子に助けてもらい命拾いしています。承久元年(1219)実朝は頼家の息子の公暁に暗殺されます。その後次に後継者争いのなかで、息子の阿野時元が政子によって自害に追い込まれました。

#### (4) 公暁の乳母の夫は三浦義村

公暁の乳母は三浦義村とその妻です。公暁は正治2年(1200)に、二代鎌倉殿源頼家の正室辻殿の嫡男として誕生。幼名は善哉(ぜんざい)です。これは祖父の頼朝の死の翌年のことでした。父の頼家は建仁3年(1203)善哉が4歳の時に北条氏の刺客によって暗殺されました。7歳になった善哉は祖母である政子のもとで着袴の儀式を行います。また乳母夫である三浦義村に付き添われ、叔父の三代将軍源実朝の猶子となりました。これも政子の計らいのよることです。



# いざ鎌倉、奥のヨコ道・女の鎌倉

## 政子をめぐる女性たち

### (1) 鎌倉の女とは

鎌倉時代初期にはこの地域の土豪たちは、弓馬の道と呼ばれ戦いに備えて弓や馬の訓練をしながらも、ふだんは農民を使う農家でした。家長には家族も使用人たちも絶対服従。家がすべて家が社会だったとのことでした。

家長が戦いに出ている間、家庭は妻がその代理を務めています。留守中に起きた問題なども責任をもって妻が処理しました。土豪の家に生まれた娘は子供のころからそういう教育を受けていたところが、貴族の娘とは違うそうです。

### (2) 当時の結婚事情

この当時の女性たちの結婚は、親が決めた相手ほとんどでした。また何かあれば本人の意思とは別に、離婚や再婚させられることも珍しくはありませんでした。それが当たり前だったのかもしれませんが、こういうなかで、いわゆる恋愛結婚をしたのは記録を見る限りは、政子だけだったといわれています。そういう意味では政子はこの時代の典型的な女性の生き方ではないようです。

たとえば北条時政の娘で政子の妹である時子は足利義兼と結婚しました。時子のことは政子と違って『吾妻鏡』では2か所しか書かれていませんので、詳しいことはわかりません。上野国の豪族で父の義康が足利荘を本拠として足利氏を開いたのです。足利氏も高氏（尊氏）が新しい幕府を作ったために、婚姻は警戒された時代に、義兼とともに先祖からの足利氏を守ったことが知れています。

時政の娘で政子の妹だった阿波局は、頼朝の異母弟で義経の同母の兄であった阿野全成と結婚します。阿波局とは役職名であり本名は不明です。実朝が生まれると乳母となります。全成は二代将軍の頼家に殺害され、阿波局の息子時元は政子の弟である北条義時に殺されました。

竹御所は頼家と比企能員の娘である若狭局の子供です。頼朝の血を継ぐ最後の人でもあるのです。兄の一番も比企の乱で、翌年には父頼家も暗殺されました。乱のときに逃げることができた竹御所はそのとき2歳でした。その後は政子が育てます。北条政子が亡くなってから、竹御所は29歳で四代将軍藤原頼経と結婚します。なんと夫は十三歳の歳の差婚。政略結婚ですが夫婦のなかはよかったようです。鎌倉に將軍の源氏の名を残そうと必死だったのでしょうか。竹御所は源氏を継ぐ子供を身ごもります。ところが死産で、33歳の竹御所も出産でこの世を去り、

源氏の血はここに終わります。

## 政子は悪女だったのか

### (1) 鎌倉時代から室町時代においては

鎌倉時代当時の史料には北条政子を悪女としているものは見当たりませんでした。鎌倉幕府の歴史の公式な書『吾妻鏡』をはじめ、『愚管抄』や『承久記』でも政子の評価は高いのです。それは室町時代の書物になっても変わりません。

### (2) なぜ悪女となったのか

政子が悪女といわれるようになったのは、儒学の影響もありどうやら江戸時代からのようです。たとえば水戸徳川家当主徳川光圀によって開始された『大日本史』のなかの「性妬忌（とき）ニシテ」とか「巖穀果斷ニシテ丈夫ノ風アリ」、こう書いたところからの連想ではないかという説もあります。

たしかに頼朝に関しての政子は「妬忌」、つまりかなりの嫉妬深さだったようですね。

それは14歳まで、都育ちの貴族だった頼朝の場合、複数の愛妾がいることは当たり前で悪いことではない、悪いことをしているつもりはないという感覚です。子孫繁栄のためでしょうか、頼朝に限らずそれは当然のこととして、当時の貴族や有力武士たちは多くの妾に子供を産ませています。政子の浮気は許さないという男女についての考え方の違いからという話もありました。これが嫉妬という形になったのでしょうか、出自を思えば、政子は伊豆の小土豪の身分、頼朝の正室にふさわしくない立場ということもあり不安な気持ちもあったのではないかと書かれたものもありました。

「巖穀果斷」とは意志がしっかりとして思い切って事を行うさま、物事にくじけないこと。丈夫ノ風＝ますらおぶりで、それは男性的でおおらかということ。江戸時代になるとそれは武家の女にとっては褒められたことでもないのか、男尊女卑というのか、男性よりも女性が上の立場になることを嫌がっているようなところもあったようですね。

さらに江戸時代の考え方の流れとして、政子の子である頼家の変死や実朝の暗殺、源家の断絶と北条家の隆盛などの出来事においてのことについて、女としての倫理に欠くのではないかと。また江戸時代の風潮としての判官びいき、つまり義経はかわいそう、頼朝は悪い人、として人気も下がり、その妻は悪妻悪女というわけです。

江戸時代の流れと、こういう言葉から想定されたとも思える悪女の印象が、流布したのではないかと。いうことでした。

## いざ鎌倉、奥のヨコ道・女の鎌倉

### (3) 北条政子の気持ちとは

鎌倉の女性に注目した永井路子の歴史小説『北条政子』も読みました。永井路子は小説家でもあります。経歴をみても本格的な歴史研究家でもあります。この小説は『吾妻鏡』を深く読んで書かれたものです。永井路子の『北条政子』の最後に、小説のなかでの政子の思いとして次の文があります。

「四十余年間、私は夫を、子供を愛しつづけてきた。その間、一夜だって、その人たちの不幸を願ったことなどありはしなかった。なのに・・・大姫、三幡、頼家、実朝、そして公暁—それらの子供たちは、まるで、指の間からこぼれ落ちる水のように、私のそばをすすりぬけ、不幸の翳を曳きながら死を急いでいった。これが愛の代償なのかだろうか。—これが私が生きたということなの?」「政子は、いま、自分が、荒涼たる孤独の座に、たった一人で取り残されていることを感じていた—私はひとりぼっちなのだ。」と。

内容が事実かどうかはわからない小説とはいえども、たぶん政子がそういう思いを持ったであろうという気持ちもわからないではありませんでした。

### (4) 小説家永井路子による素顔の政子とは

『かまくら春秋』2023年2月号に「素顔の政子」として永井路子と安西篤子の対談が掲載されています。小説『北条政子』の作者である永井による政子の素顔への思いが、安西との会話のなかで述べられていますので、以下その一部をここに掲載させていただきます。

永井「私は政子をいわゆる悪女だとは思わないんです。政子っていうのは人間的にも単純な女ですよ。中略、最も典型的な女の失敗であるところの、愛情過多により、彼女の生涯は失敗であったと思いますね。言いかえれば愛情過多の為に失敗した一人の女の生涯だったとみているわけです」

永井「田舎の女で、中略、とにかく政子なんて何の教養もない女がにわかには歴史のトップに踊り出してくる。その時にどういふ失敗をやらすか。その見本みたいな気がするんですね。」

永井「結果は全部裏目に出してしまう。だからもつと政治的配慮がある人だったら、受けて出るべきか、一步下がって待つべきか権力とのふれ合いをうまく調整すると思うの。だけどそれをするには余りにも無知だった—その意味では気の毒だったと思います。と同時に女の愛というもののすさまじさですね。憎しみ合うことよりも愛し合うことの力の方がかえって人を傷つけるということがよくわかりますね」とのこと、永井による辛口の本音でしょうかね。

ものごとは立場で見方が変わります。たしかに女性たちの鎌倉という視点で北条政子を見てみると、世間で言われているような政治力がある猛々しい印象よりもむしろ、北条政子の並々ならぬ異常とも思える愛情の深さが見え隠れします。

とくに將軍頼朝の妻として、ふたりの將軍の母として、そしてふたりの娘の母として、さらに孫や身内への政子の愛情です。しかし自分の生んだ子供たち全員も孫も父も兄も弟も、暗殺や病気や戦いで政子より先に次々と亡くなります。それも弟が父を殺し、八幡宮の参拝では同じ日に、孫が政子の子を殺しその孫も即暗殺され・・・こうして次々に死に至ります。最後はひとり尼としての日々を送った鎌倉の女性としての姿が見えてきました。

### <編集後記>

編集長・鶴田昭彦

取材を行ったのは盆明け早々、とにかく暑い真夏の日差しの中、鎌倉を歩き回りました。それでも木々に覆われたお寺の境内に入ると、ずっと気温が下がり、静けさが伝わってきます。やがて暑い夏も終わりを告げると秋が来て、そして四季が繰り返されていく。遙か鎌倉の昔から幾星霜を経て今日にいたるまで、数えきれない人たちが人生の喜怒哀楽を訴えてきた、時の重さを感じたのでした。

編集部執筆者・中田節子

今回は鎌倉におけるいわゆる武家の女性たちということで、まずは必ず名前が出る北条政子を中心に書かせていただきました。政子についてのいくつもの論文、および小説も読んでみました。時間はかかりましたが、とても面白い仕事でした。そうしてみると、定説となっている猛々しい悪女としての政子の印象が、また違ってきました。政子には公と私の二面性はあると思いつつも、いいかたをかえれば、良かれと思ってであろうその決断、そして愛情の深さとヒステリックともいえる押し付けるような私の強さから、「悪女の深情け」という意味での悪女なのかもしれません・・・。

今回の特集、「いざ鎌倉、奥のヨコ道・女の鎌倉」はいかがだったでしょうか。放友会だより編集部では、ご感想、ご意見をお待ちしております。皆様からいただきました情報をもとに、より良い誌面づくりに役立てていきたいと思っております。メールは、[info@kanagawa-hoyukai.jp](mailto:info@kanagawa-hoyukai.jp) まで。お待ちしております。  
\*無断掲載、無断転載等、禁止致します。



# 散策コース

鎌倉駅西口



- 1 寿福寺
- 2 鶴岡八幡宮
- 3 頼朝墓
- 4 妙本寺
- 5 安養院
- 6 若宮大路
- 7 段葛



鎌倉駅東口

